

# 東北大学数学教室だより

石田 正典

東北大学大学院理学研究科数学専攻

## 東北大学創立百周年

東北大学は今年 2007 年に創立百周年を迎えます。これは 1907 年 6 月 22 日の官報に東北帝国大学設立の勅令が載ったとることによるものです。ちなみに、夏目漱石が朝日新聞に入社して初めて書いた新聞小説「虞美人草」の連載開始が 1907 年 6 月 23 日で、朝日新聞のこの小説第一回と同じ紙面にこの勅令についての記事が出ているようです。もっとも虞美人草は私には難しくて読んでほとんど意味のわからない小説です。漱石の小説の中で一番読みやすく面白いと思ったのは体験レポートのような「坑夫」ですが、これが虞美人草の次の連載小説というのは意外です。とにかく、この勅令のあと東北帝国大学理科大学の開設準備が始まって、実際に講義が始まったのは 4 年後の 1911 年 9 月のことです。このときに数学科の講義も開始されています。数学科開講時の林鶴一教授が、開講前の 1911 年 8 月に、今に続く欧文数学専門誌である東北数学雑誌を私費を投じて創刊していることは驚きです。なお、林鶴一教授や東北数学雑誌のことは上野健爾氏による「数学のたのしみ」の記事 [1] に詳しく書かれています。

少子化の影響で学生の確保が難しくなっているのは全国どこの大学も同じでしょうが、地理的に背後にかかえている人口の大きくないことから、東北大学は昔から学生確保で苦労しているようです。その分、帝国大学で最初に女子学生を受け入れるなど、広く学生を受け入れる努力をしています。数学通信に掲載された伊藤雄二氏による記事 [2] によれば、大阪出身の角谷静夫氏が東北大学数学科に進学したのは、角谷氏が旧制高校の文科出身だったため、理科出身者しか受け入れない京都大学数学科に入れなかったためだそうです。

## 30 年前から

私が東北大学数学教室の教員となって今年で 30 年になります。私が助手として来たときの数学科は 8 講座で、教授は 5 人、助教授 6 人、助手 13 人でした。当時、私の出身大学の方に聞いた話では、他のほとんどの旧帝大の数学科が 9 講座あるのに東北大学だけが 8 講座なのは、かつて旧帝大の数学科がそろって 10 講座に拡大しようとしていたところ、文部省が 9 講座しか認めないとの情報があり、東北大学だけが初めから 9 講座を申請したところ一律に 1 講座ずつ削られて 8 講座になったとのことです。京都大学だけは削られることを見込んで 11 講座を申請したので、予定通り 10 講座に出来たのだそうです。

仙台に来て一年余り過ぎた 1978 年 6 月に宮城県沖地震があり、当時仙台市の中心に近い片平地区にあった数学教室も窓ガラスが割れたり本箱が倒れるなどかなりの被害がありました。理学部の他の学科はすでに移転が終わっており、数学科も翌年に今の青葉山キャンパスに移転しました。

## 青葉城恋唄

私が仙台に来て 2 年目、この地震のあった年にさとう宗幸の青葉城恋唄が全国的に大流行しました。仙台の情景を織り込んで「ときはめぐりまた夏が来てあの日と同じ … あの人はもういない」という歌詞の歌ですが、なぜか題の青葉城は出てきません。この曲で歌われているのは 1 番が広瀬川、2 番が七夕まつり、3 番が青葉通りです。

青葉通りは仙台駅から西に向かって 2 キロ続く主要道路で、仙台のショッピング街は青葉通りの北側を平行に走る中央通りと、青葉通りの中程を南北に横切る一番町通りです。8 月の七夕まつりのときにはこれらのショッピング街に竹飾りが並び立ちます。移転する前の数学教室は一番町通りの南の端に続く片平キャンパスにありました。ここにいた頃は一番町通りに昼食をとりに行くことがよくありました。青葉通りの西の端からさらに西に道は続いていて、広瀬川を横切り南側は青葉城となるところに、東北大学の文科系の学部や全学教育を行う川内キャンパスがあって、数学教室を含む理学部は、ここからさらに曲がりくねった道路を上がっていった青葉山キャンパスにあります。

## 研究資料室

東北大学数学教室の図書室は「研究資料室」という名前になっています。以前は普通に「図書室」と言っていたのですが、20 年余り前に数学教室のある北青葉山キャンパスに大学付属図書館の分館が出来て、このキャンパスにある理学部と薬学部の図書をここに集約することになったときに、数学の図書室を研究資料室という名前に変更したものです。その甲斐があつてか、数学の雑誌や書籍はいまもほとんどが数学教室の研究資料室にあります。5 階建ての数学棟の 3 階全部がこの研究資料室です。ここに入りきれない雑誌や単行本が、数学棟の 1 階の別室や総合研究棟の数学の専有している書庫にも置かれています。2001 年度から私がこの研究資料室の主任となっていますが、この間、専門雑誌の価格高騰と電子ジャーナルの一般化の影響で、全学の雑誌共同購入、冊子体の一本化、課金方式の改定など毎年雑誌の購入制度が変動しています。現在は電子ジャーナルのアクセス数により各部局の課金率を決定する方式に移りつつあります。

来年は関孝和の没 300 年とのことですが、数学教室の旧図書室は、数学科開設当時の林鶴一教授や藤原松三郎教授などが収集した和算書を大量に保有していました。これらは現在は東北大学附属図書館に移管されています。これらの和算書については、1990 年代の後半に附属図書館長を務められた数学専攻の小田忠雄名誉教授や附属図書館の方々の努力により目録が整理され、現在ではそれら和算書の内容をインターネットの画像として見られるようになっています。興味があれば和算ポータル：<http://www2.library.tohoku.ac.jp/wasan/> をご覧下さい。

## 談話会

数学棟の北側には、東北大学数学科の卒業生で保険会社を創業した川井三郎氏の寄付による 2 階建ての数理科学記念館があります。ここには 70 名程度を収容できる講演のできるホールがあり、この記念館自体を通常「川井ホール」と呼んでいます。数学教室の談話会は毎週月曜日の午後 4 時からこの川井ホールで行われています。談話会では集中講義に来られた講師やその他の来客、また数学教室内部の人の講演が行われます。聴衆は数学教室のすべての分野から来るので、予想より人数が多くて驚

く講師の方もよくおられます．時間をあまり気にせずに講演をという意味か，このホールには時計が掛かっていません．しかし 1 時間の講演時間は大体いつも守られているようです．

## 参考文献

- [1] 上野健爾，林鶴一と「東北数学雑誌」，数学のたのしみ 2005 秋，日本評論社，94 - 101.
- [2] 伊藤雄二，角谷先生を偲んで，数学通信 9-3, 46-52.  
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/msj6/sugakutu/index-9-3.html>